

原 著

体育学部学生の体格と血圧及び血液データの相関について

Correlation between Body Characteristics and Health Indices of Freshmen in the Faculty of Physical Education

伊 藤 拳*, 桂 沢 靖 弘*, 牧 亮*, 石 堂 恵美子 **

Susumu ITO *, Yasuhiro KABASAWA *, Akira MAKI and Emiko ISHIDO **

ABSTRACT

We analyzed correlation between body characteristics and health indices obtained from the freshmen of the faculty of physical education of Kokushikan University. Height, weight and chest measurement were used as body characteristics. By the principal component analysis, these three components were compressed into the two dimensional plane spanned by the first and the second principal components. In the male students ($N=364$), the height projected to this plane had the direction of 54.6° from the first to the second component axis. The weight and the chest measurement had the directions -9.4° and -30.5° , respectively. As health indices (28 items), blood pressures and blood test values common in usual health checkup were used. Most of the health indices had significant correlation with the first and/or the second principal components. Their correlation coefficients distributed in the plane almost along the chest measurement axis, but slightly more negative direction, so that many of the health indices had highly significant correlation with the chest measurement, while they only had a slight, if any, correlation with height. Among 28 health indices, systolic blood pressure, GOT, GPT, LDH, γ GTP and uric acid had the high correlation coefficients of more than 0.3 to the chest measurement. In the female students ($N=115$), height, weight and chest measurements had the direction of 50.9° , -6.7° and -34.1° , respectively. The correlation coefficients seemed to be distributed more evenly in the principal components plane than in the male students. These results showed that the chest measurement carries, at least in the male student, a considerable portion of the information common to the health indices, while the height seemed to carry the information independent of them.

Key words; obesity, blood pressure, medical check-up, university student

* 国士館大学体育学部スポーツ医科学科 (Dept. of Sport and Medical Science, Faculty of Physical Education, Kokushikan University)
** 国士館大学体育学部健康管理室 (Student Health Centre, Faculty of Physical Education, Kokushikan University)

は比較的近く、身長はそれらとは離れた方向となった。第1主成分の軸を基準として第2主成分の軸を+90度とすると、身長、体重、胸囲の軸は男子ではそれぞれ 54.6° 、 -9.4° 、 -20.1° であった。女子ではそれぞれ 50.9° 、 -6.7° 、 -26.0° となった。

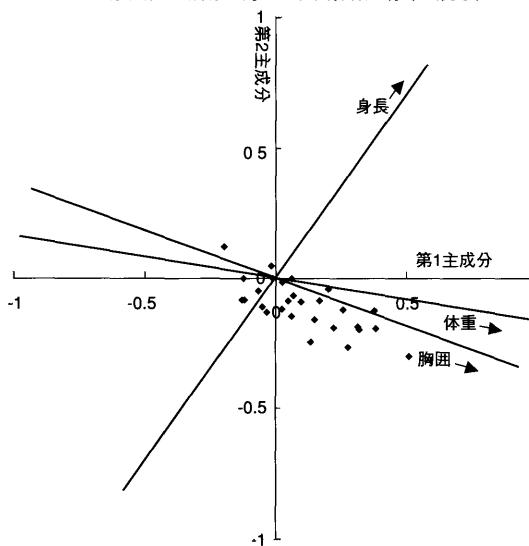
表2にこれら体格の指標と血圧および血液データとの相関係数を示した。相関を取る組み合わせが多く、偶然の相関が表れる可能性が高いことから、有意水準を $p<0.0001$ とした（表中太枠太字で表示）。身長は男女とも有意な相関を認めるものはなかった。ただし、男子の貧血に関連した指標（Hb、MCH、MCHC、フェリチン）では p 値が5%未満であり、弱い負の相関が存在する可能性は示唆された。体重は男子では28項目中10項目で有意な相関が見られた。とりわけ収縮期血圧、GOT、GPT、 γ GTP、尿酸の5項目では特に強い相関（ $p<10^{-10}$ ）を示した。男子のBMIに対しては12項目で有意な相関が認められ、体重での5項目に加えLDHでも特に強い相関が示された。胸囲も男子では10項目で有意な相関があり、BMIと同様の6項目で特に強い正の相関を示した。第1主成

分は男子で9項目に有意な相関があり、3項目で特に強い相関を示した。有意な相関のあったものはHDLコレステロールを除き全て正の相関であった。HDLは体重、BMI、胸囲に関して有意な負の相関を示した。第2主成分はこれに対し、GPT、LDH、フェリチンで有意な負の相関を示した。女子では調査数が男子より少ないが、男子と同様の基準を用いると、有意であったのは体重及び第1主成分と拡張期血圧との正の相関、第2主成分とGPTとの負の相関のみであった。

男女別に第1主成分、第2主成分に対する相関係数の散布図を見ると（図1）、男子では胸囲を投影した軸にほぼ沿った形で分布した。女子では分布のばらつきが大きいが、僅かではあるが、胸囲に沿った方向に分布する傾向は見とめられた。身長を投影した軸は相関係数の分布の方向とほぼ直交した方向にあった。

男子のGPTは体重、BMI、胸囲のいずれとも相関係数0.5以上の強い相関を示した。図2Aは男子のBMIに対するGPTの値の散布図である。BMIが18から28までの間でも正の相関傾向は認められる

A. 第1主成分、第2主成分に対する相関係数の分布（男子）



B. 第1主成分、第2主成分に対する相関係数の分布（女子）

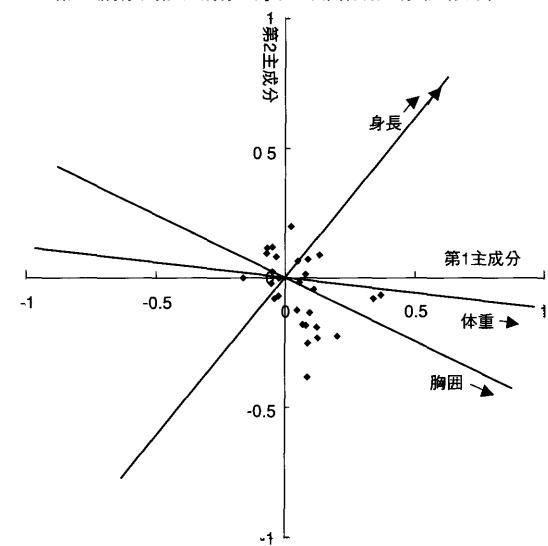


図1

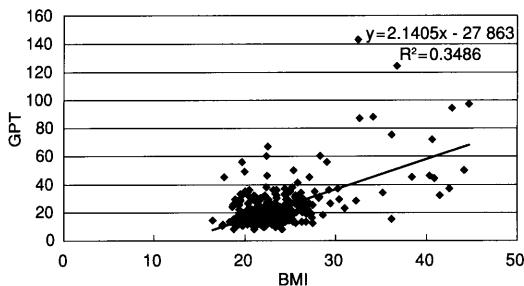
が、BMIが30以上でGPTが特に高い者が多かった。男子で体重、BMI、胸囲との有意な負の相関が認められたHDLコレステロールのBMIに対する散布図を図2Bに示した。BMIが18から28ではHDLは100近くまで分布しているのに対し、BMIが30以上ではHDLコレステロールは殆ど60を越えなかった。血圧は男子では収縮期血圧、拡張期血圧ともに体重、BMI、胸囲と有意な正の相関、女子では体重と拡張期血圧のみが有意な正の相関があったが、図2C、Dで見られるように回帰直線の傾きは収縮期血圧、拡張期血圧とともに、女子のほうが大きい傾向であった。

考 察

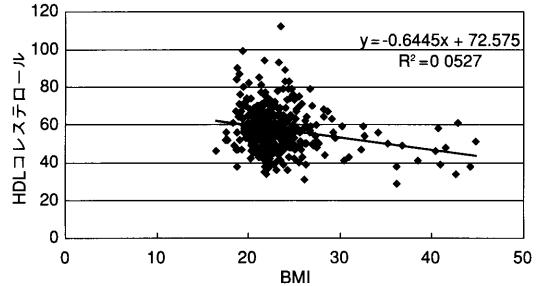
今回の結果では、体育学部の入学時健診において、体格と血圧、血液データ等の健康指標との間

に強い相関が存在する事が示された。その中で、身長は比較的他の健康指標との相関が小さく、体重、胸囲、BMI⁵⁾などの肥満の指標とされるものがやはり種々の健康指標との相関が強い結果となった。男子の結果のみで見ると、これらの指標は血圧との正の相関があり、特に収縮期血圧との相関が強い。また、肝機能などの指標であるGOT、GPT、LDH、γ GPTとも強い正の相関が認められる。高脂血症に関連しては、総コレステロールとの相関は弱いが、中性脂肪とは正の相関、HDLコレステロールとは負の相関が認められた。これらの指標は中高年での生活習慣病の発症に密接な関係があるとされているもので、肥満が生活習慣病の危険因子とされている事と一応の整合性がある。一方、貧血の指標とではフェリチンと負の相関がある以外は有意な相関は認められない。尿酸、クレアチニンも正の相関が認められ、これらの物

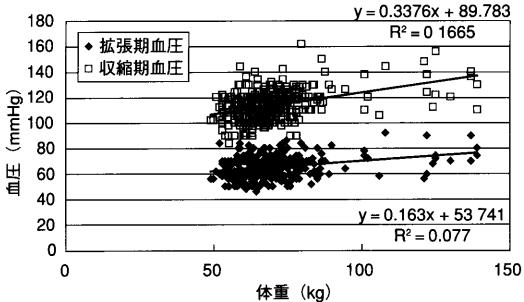
A BMIとGPT（男子）



B BMIとHDLコレステロール（男子）



C. 体重と血圧（男子）



D 体重と血圧（女子）

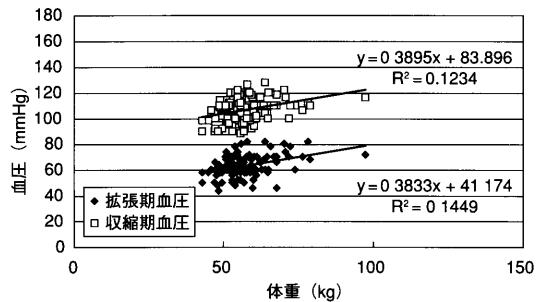


図2

質と関連した代謝の亢進を示している可能性が考えられる。意味付けは明らかでないが、白血球との正の相関も見られている。

身長、体重、胸囲の3成分を主成分分析によって直交する2成分に圧縮した平面上で見ると、男子では胸囲を投影した軸に沿って、あるいはそれよりやや負の角度を持った軸上に多くの健康指標の相関係数が分布している事がわかる。身長の軸は胸囲の軸とほぼ直交するので、身長は殆どの健康指標と有意な相関を持たない結果となる。BMIは第1第2主成分と線形な関係にないので、主成分平面上に軸として表示する事はできないが、BMIと身長との相関が体重、胸囲と身長との相関よりさらに小さい事からも近似的にはほぼ身長と直交した軸に近いと見なせ、期待される通り多くの健康指標と有意な相関を持っている。女子では相関係数の分布にあまり明らかな傾向は見られなかったが、標本数が足りない為のばらつきのせいもあり、標本数を増やして再検討する必要はあると思われる。

これらの結果からすると、胸囲ならびにBMIが健康指標に関する情報を最も多く含み、かつその増加が生活習慣病の発症を促進する方向と一致していることから、この時期の集団に対しても生活習慣病の1次予防の為の指標としては有用である事が示唆される。但し、対象が体育学部の新入生というやや特殊な集団であり、健康指標のばらつきの範囲も一般の集団の基準範囲とされる値³⁾よ

り高値に亘っているので、その解釈にはその点を留意する必要がある。

運動は、過度でない限り健康の維持に有用に作用する事は明らかとなってきているが⁶⁾、多くの種目において運動選手にはある程度以上の体格を維持する必要がある以上、それが生活習慣病の発症を促進する方向に作用していないかどうかを明らかにすることは、体育科学及び健康科学上重要な問題であると思われる。この年齢での健康指標の偏りが、長期的な生活習慣病の発症率や寿命に有意な影響を与えるかどうかの大掛かりな検討がいずれ必要となって来ると思われる。

本研究は体育研究所の2002年度研究助成を受け行われた。

引用・参考文献

- 1) 伊藤拳、梶沢靖弘、牧亮、石堂恵美子、中山昭子：体育学部学生の入学時健診における健康指標、国士館大学体育研究所報、20:81-89、2001
- 2) 公衆衛生審議会：生活習慣に着目した疾病対策の基本的方向性について（意見具申）、1996、12、18
- 3) 高久史麿（監修）、臨床検査データブック2001-2002、医学書院、東京、2001。
- 4) 竹内啓、柳井晴夫：多変量解析の基礎、東洋経済新報社、東京、1972
- 5) 山口嘉和：肥満、117-121、inわかりやすいスポーツ医学、天羽敬祐監修、総合医学社、東京、2002
- 6) 渡辺剛、前山定：健康維持増進・疾病予防の運動処方、61-68、inわかりやすいスポーツ医学、天羽敬祐監修、総合医学社、東京、2002